市貝産の「菊炭」クヌギ植え再び

NPOと製炭業者

名産地復活へ協働

里山環境保全にも一役

茶の湯など日本の伝統文化を支える「お茶炭（菊炭）」の生産を再興し里山の再生を進める取り組みが15日までに、菊炭の名産地の市貝町などで始まった。NPO法人と製炭業者が協働で原木のクヌギを植えるプロジェクトに着手、都内のNPO法人も、同町に拠点を置く花王の助成を得て植林を始めた。生産の衰退に危機感を抱く製炭業界も注目している。（飯塚博）

遠藤さん（中央）や片岡さん（右）に宇都宮大の学生らも加わって苗畑で行われたクヌギの苗の掘り出し＝6日午前、市貝町市塙

放射状に伸びる割れ目が菊の花のように美しい菊炭

市貝産の菊炭は以前から、ブランド炭として「芳賀もの」と呼ばれるなど、その品質が高く評価されてきた。一方、原木などの生産は広大な里山の環境を守ることにつながってきた。しかし現在、市貝町内の製炭者は数人しかいない。

「菊炭がなくなれば茶道もなくなる」。8日、芳賀町の民有地で行われたNPO法人「炭の木植え隊」（東京都中央区）の植林作業。谷田貝光克理事長（74）＝東京大名誉教授＝は強く訴えた。まず苗木300本を植える。

製炭者としてこの日の植林活動を指導した市貝町石下、製炭業片岡信夫さん（53）は、その2日前、同町のNPO法人「オオタカ保護基金」（遠藤孝一代表）と「サシバの里・菊炭プロジェクト」を始動した。

まず、ドングリから育てた3年生の1千本の苗を町内の同基金の保全地約4千平方㍍に植え、7年後に伐採して菊炭にする。この「クヌギ植林保全地（仮称）」を拡大していく計画だ。

菊炭には、7年ほど育てたクヌギの細く丸い若木を定期的に切って使うのが最適だ。「切っても芽が出て、利用すればするほど森は若返る」（谷田貝さん）。遠藤代表（59）は「草地性の動植物の生息地・生育地になり、サシバの狩り場になる。菊炭の収益で自立的、持続的な保全が可能になり、環境と経済両立のモデルになる」と期待する。

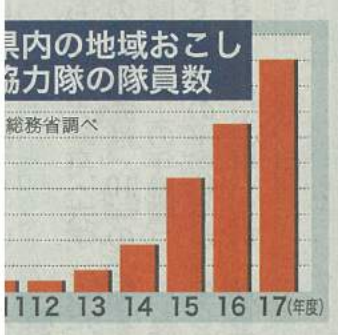
高度な技術で作られ〝芸術品〟といわれる菊炭には、国内産の一般的な燃料炭の7～8倍の値が付く。だが、供給量は先細りだ。従事者の高齢化に加え、東京電力福島第1原発事故の影響で福島や宮城のクヌギが使えず、窯もつぶしてしまった影響が大きいという。

「今やらないと菊炭の市場そのものが消える。次の世代につながる事業にしたい」と危機感を抱く片岡さん。林野庁も関心を寄せており、全国燃料協会の杉本正二専務理事（61）は「菊炭作りを若手に伝承してほしい」とエールを送る。

ズーム　菊炭　茶道で湯を沸かすのに用いられる輪切りにした高級炭。クヌギを原料とし、断面に菊の花のような美しい放射状の割れ目が出ることから、その名で呼ばれる。

地域おこし協力隊

最多90人に



地方で一定期間暮らし、活性化を支援する「地域おこし協力隊」の県内の参加者が2017年度、過去最多の90人だったことが15日までに、総務省のまとめで分かった。前年度より25人増加し、受け入れ市町は16から22に拡大した。増加は全国的な傾向で、若者を中心に活動への関心が高まっているほか、受け入れ自治体は県と宇都宮、下野、壬生の3市町。

全国の参加者は4830人で、前年度比852人増。隊員の年齢は30代が38・3%、20代が33・3%で比較的若い人の割合が全体の7割超を占めた。男女別では、女性の割合は38・4%だった。都道府県別では、北海道が602人で最も多く、長野の385人、島根の221人と続く。17年度は足利、小山、那須烏山、上三川、芳賀、野木の6市町が新たに隊員を採用した。未採用だった自治体は自治体の募集に応じて、1～3年間移住。自治体の嘱託職員などとして特産品開発や高齢者の生活などを手伝う。総務省は特別交付税で財政支援している。

一方、17年3月末までに任期が終了した隊員は県内で22人おり、半数の11人が活動地と同一または近隣の市町に定住した。全国では任期終了者が2230人

年度初めの力試し

下野模試に4500人挑戦

下野新聞模擬テストに臨む中学3年生たち＝15日午前、宇都宮短大付属高

中学2、3年生を対象とした新年度最初の下野新聞模擬テスト（下野新聞社主催）が15日、県内の高校や大学3カ所と学習塾約250カ所を会場に行われ、約4500人が日頃の勉強の成果を試した。

試験は記述式で国語、社会、数学、理科、英語の5教科。県立高入試を想定した内容で出題された。宇都宮短大付属高では約480人が試験に臨み、真剣な表情で問題を解いていた。

同付属中3年の篠崎直生さん（14）は「普段から応用問題を解いて模擬試験に備えたが、まだまだ準備不足だと感じた。夏までに克服して偏差値アップにつなげたい」と話した。

次回は3年生が6月24日、2年生が8月26日に実施される。（杉町ハナ）

あす全国学力テスト

3年ぶりに理科実施

小学6年と中学3年の全員を対象にした文部科学省の「全国学力・学習状況調査」（全国学力テスト）が17日、一斉に行われる。3年ぶりに理科を実施し、国語と算数・数学の3教科となる。国公立の全校と私立の49・8%が参加し、小中合わせて2万9709校の約213万4千人が受ける。

同省が結果を集計し、7月に公表する予定。

国語と算数・数学は基礎分析に役立てる。

結果公表はこれまで8月だったが、教員が夏休み期間中に結果の分析などをできるよう7月に前倒しする。

47NEWSが問題と解答公開

午後5時すぎから

全国の地方新聞社と共同通信でつくるニュースサイト「47NEWS」は17日、小学6年と中学3年を対象に同日実施される全国学力テストの問題と解答を公開する。

URLは、https://www.47news.jp/で、トップページに設けた全国学力テストのバナーから掲載ページに入れる。公開は17日午後5時すぎから。

談話室

○…地域住民が牛丼を食べながら交流する「子ども牛丼まつり　高齢者カフェ」が15日、足利市里矢場町の矢場川公民館で開かれた。約130人が手作りの牛丼を楽しんだ＝写真。

○…地元ボランティアグループ「やばがわの風」が

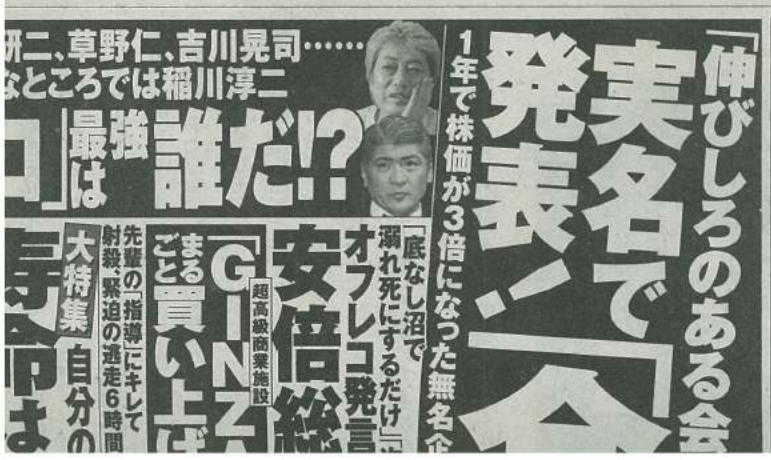
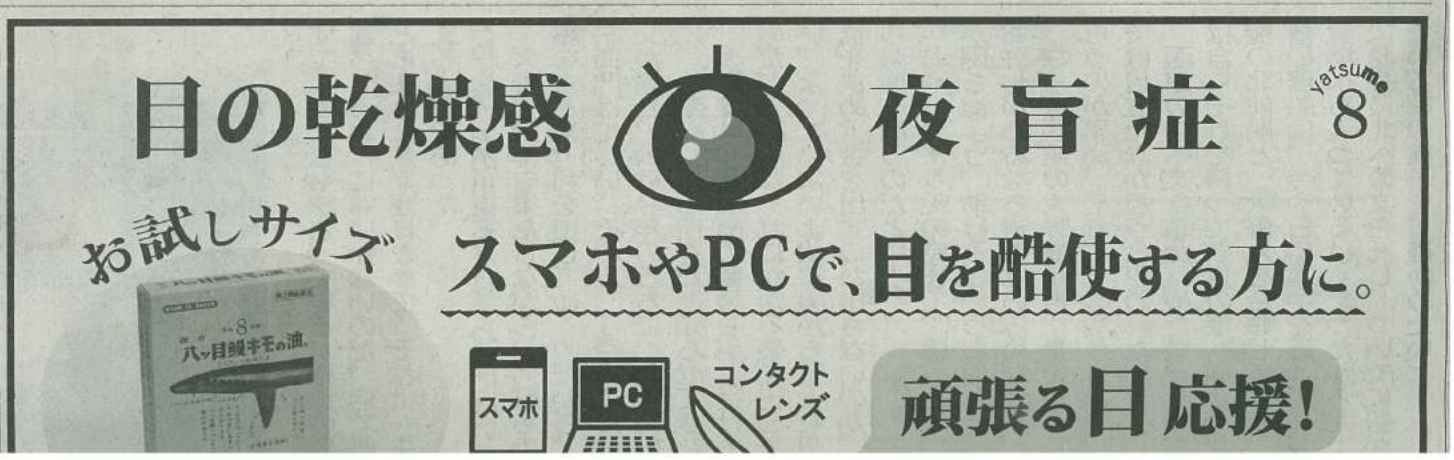
市議選投票用紙二重に交付か

日光市選管

15日投開票の日光市長選と市議選で、市選挙管理委員会は同日、同市大室、今市第29投票所（市農村環境改善センター）で、市議選の投票用紙を有権者1人に誤って2枚交付した可能性があると発表した。

市選管によると、同日午前9時半ごろ、投票管理者が残票を確認したところ、同日投票した人数に対して、市議選の投票用紙の残票が1票少なくなっていたという。二重投票された可能性があるが、票の特定は難しく有効になる。

市選管は昨年10月の衆院選の期日前投票、今月13日の日光市長選と市議選の期日前投票でも投票用紙の交付ミスがあった。

県内の交通事故　14日

発生		7件
	本年累計	1,243件
	前年比	−211
死亡者		1人
	本年累計	27人
	前年比	2
負傷者		9人
	本年累計	1,507人
	前年比	−331